デート・ア・ライブ　懺悔精霊＜フレイ＞

皐月の王

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

父からは暴力を受け、母には存在を否定され、最後には殺されてしまった少女は、

転生し精霊となり、デート・ア・ライブの世界に行く。その世界で彼女は何を思い何をするのか

記憶は……奥底に封じられて

目　次

設定（現段階）―― 1
少女は死して精霊となる ―― 3
同じ境遇のひと ―― 7
出会う三人 ―― 13
タイミングは悪く ―― 19
協力協定 ―― 25

設定（現段階）

名前：天輝（あまき）　焔華（ほのか）
身長：１５７ｃｍ
スリーサイズ：Ｂ７７／Ｗ５６／Ｈ８１
好きなもの：飴、ゲーム
嫌いなもの：辛いもの
識別名：〈フレイ〉
総合危険度：Ｓ
空間震規模：Ａ
霊装：Ｓ
天使：ＡＡＡ
ＳＴＲ（力）：２５０
ＣＯＮ（耐久力）：２７０
ＳＰＩ（霊力）：２９０
ＡＧＩ（敏捷性）：２９０
ＩＮＴ（知力）：１６５
天使名：〈懺悔君主（ウリエル）〉
霊装名：〈神威霊装・番外（アドナイ・エロヒム）〉

概要：金髪、赤目の少女。軽装の鎧と、腰には紅い外套をつけた姿で現界する。初現界時に、ＡＳＴと交戦し、圧倒的な力と手加減でＡＳＴの装備だけを破壊し撤退させた。それでＡＳＴからは「Ｓ級精霊」として扱われ、識別名〈フレイ〉と名付けられた。

人物：ある意味で見た目年齢に不相応に素直で優しい人物。敵対していようと、相手の身を案じてできる限り、傷つけないように無力化を試みる。知り合いならば自身の身を犠牲にしてでも助けようとする歪な在り方がある。

当然、痛いのは嫌だしそんな思いはしたくないと思っている。が、それ以上に他人が苦しむ、痛い思いするのなら……、と考えている人物である。これはあくまでも転生後の彼女である。

過去

転生前は両親から虐待を受けており、心理的にも身体的にも虐待されていた。ある日を境に父親は酒に溺れるようになり、母親と焔華に暴力を振るうようになり、母親は状況と父親の暴力、被害妄想により精神的に病んでしまい、焔華に心無い言葉を浴びせるようになった。否定され続けた焔華は何処かで元に戻るように願いつつも、半ば諦めていた。精神は壊れそうだったが、家にあったゲームと密かに買う飴がそれをつなぎ止めていた。その時間だけが、自分が否定されない時間であり、幸せであった時間の象徴だったから。否定されたことにより、誰かに認めて欲しいという思いが強くなるようになったが、誰からも認められず最後は父親に刺されてしまった。その記憶は今は奥底で胎動している。

〈懺悔君主（ウリエル）〉

《炎剣（ソル）》《光槍（ルクス）》の二つからなる天使である。太陽の炎と光を剣と槍から攻撃として利用する。加減せずに放てば、周りを融解させてしまう程の熱を剣から放ってしまう。そのため、戦闘能力は非常に高い。

また、魂に干渉する力を持っている。しかしまだ、本人が無意識に封印しているため現在は使えていない。

《審判ノ剣（ソル・ブレイズ）》

紅き剣を解放して放つ一撃。最大火力で山1つを融解させるほどの熱量を誇り、余波でその場の地面も融解させる。

《裁定ノ槍（クォ・ヴァディス）》

光の槍を解放して放つ一撃。街一つを灰燼に帰し巨大なクレーターを生み出すことも可能である。威力を絞り、高速の閃光としても放つことが可能。

《閃光（ルクス・ヴァイス）》

光を纏いスピードを上げる。光の速度にも達することも可能である。

《天光雨（ラディウス・インベル）》

自身の周りに光球を展開して放つ技。空から雨のように光球を降らすことも可能。

少女は死して精霊となる

「そんな目でこっち見るな！俺の前から失せろ！」

何度も言われた、何度も、何十回も、何百回も否定される。何度も殴られ、蹴られ、憂さ晴らしの道具にされる。上手くいかない時の八つ当たりは少女に来る。少女が失敗しても同様だ。気に入らなければ暴力を振るわれる。

「お父さんと結婚しなければよかった!!!貴方を産まなければ私は!!!」

少女は認めて欲しかった。自分を見て欲しかった。優しかったはずの母親は壊れた。いや、父親が酒に溺れた日に暴力を振るわれ始めた日から、徐々に壊れていった。

「やめて！お父さん！」

懇願する少女。しかし、その願いは届かず腹を蹴られ、髪を捕まれ持ち上げられたかと思うと、投げ飛ばされてしまう。壁に強く打ちつけられる。衝撃で息が出来なくなる。

「うっ！ゴホッ…ゴホッ…ウッ！」

これが少女の日常であり、そこに救いなんてない。

「貴方のせいよ！あの子が傷だらけで訳わかんない人が来るのは！私はあの子を見たくない！あの子がいるからこの地獄も続いて、私は救われないのよ！」

「お前が狂っているからだろ！お前の教育が良くないからあいつは……！」

ガラスが割れる音と言い争う父親と母親の声が耳に入る。少女は聞きたくないと耳を塞ぐ。自分を否定する言葉と、仲良くして欲しい二人の言い争う声。地獄のような場所で願うのは地獄に終わりが来ることである。狂いそうになるし壊れそうになる毎日の中、それを願い続ける。

「――――あぁ……我慢ならない。お前が俺を否定するなら……俺を不幸にすると言うなら……!!!」

「何をするつも――――」

その後、母親の悲鳴だけが家に響き渡る。少女は震えた、体から熱

が逃げていくのを感じる。この場から動いたらまた痛い目に合うだろう。しかし、気になってリビングに見に行ってしまった。
　そこでの光景は少女には刺激が強すぎた。動かない母親とその上に乗る父。手には刃物が握られており、赤い液体が着いていた。母親は……確かめるまでもない。自身の血の海で眠るのみ
「あっ……あ……」
「……見たんだな」
　静かで厳かな声で父親が尋ねる。父親は少女に向き、一歩、一歩と近づき……
「……お前も、俺を否定するんだよな？お前も俺が嫌いだよな？だったら……」
「え……あ……。…え？」
　ドス……。
　鋭い痛みが腹部に広がる。鉄の味がする液体が口から零れる。
「最後に俺の為に死んでくれ」
　涙が零れた、これで終わるのだと思うと涙が溢れた。幸せな時間もあったはずなのに、残酷なまでに救いは無かった。

『君は不幸だった。君は報われなければならない』
　その声以外何も感じない所で少女は存在した。
『君は生きていい、救われるべきだ』
「貴方は……？」
　声は少女の質問に対して、何ともないように
『僕はただのお節介さ。で、君を転生させる。力を君に宿させてね。それに合わせた世界に転生させるよ』
　少女は言われたことにピンと来なかった。しかし、自分が死んだということは分かった。転生は生まれ変わるということだ。そして最後に感じた腹部の痛みは今でも覚えている。
「私……あっ…」
『時間みたいだね。ここでの会話の記憶も残らないし、気兼ねなく転生して思うように生きてね。天輝　焔華ちゃん』

焔華の意識は途切れる。頭が痛む気がした、それと同時に、名前と一般常識以外の体験と記憶は全て奥底に消えていく。
次に目を開けた時にはクレーターの中心に立っていた。破壊された街並みのクレーターの真ん中に立っていた。
頭の中に今の姿の情報が入ってくる。
「あっ……っつう！」
苦悶の声をあげ頭を抑える。その時腕を見た。
両腕は肘のところまで金色の篭手が着いており、両足は膝の近くまで金色のグリーブがつけられている。背中には二つに分かれた赤いマント、腰にも赤いマントがある。体を見ると赤い鎧を身にまとっていた。
「……ここは、それにこの街」
破壊された街、クレーターの真ん中に佇む。どうすればいいか分からない。何から始めればいいかなんて誰も教えてくれないだろう。そんな中、空から声が聞こえる。
「目標確認！霊力のパターンから見て新種の精霊です！」
敵意、殺意を向けてくるのが分かる。人が空を飛んでいる時点でそっちも気になるが、向こうはこちらに敵意を向けている。彼らはＡＳＴである。対精霊部隊、精霊を狩り、精霊を殺すために機械の鎧を纏う魔術師達。もちろん焔華と話す気はなく、処理しに来たのだ。そんな時、頭に天使の名が浮かぶ。焔華はその名を告げる。
「……《懺悔君主（ウリエル）》！」
天使の名前を告げると、両手に二つの光が集まり武器が握られる。右手には紅く燃え上がる炎の如くの剣。円状の中央に柄が存在し、三対の太陽のような意匠があり、それは真紅の短い刃のような物だ。左手には上下には槍の矛先が存在し、二対の翼があり円状の中央に柄がある形を成していた。
「霊力の上昇を確認……！天使です！」
「っ！何をしかけてくるか分からないわ！警戒しながら攻撃開始！」
ＡＳＴからミサイルが放たれる。光の槍と横に軽く振る。その軌跡から無数の光弾が展開される。

「行って！」
号令を出すように槍の矛先をミサイルに向ける。光弾は迫り来るミサイルを撃ち落とす。それを免れたミサイルは、剣を地面に刺し炎を壁を作り出し防ぐ。炎はクレーターを赤熱させ融解させる程の熱を放った。焔華は慌てて剣を抜く。軽く融解する地面を見て
（加減しないと人を殺してしまう……。あの人たち訳が分からないけど、あ機械と武器を壊せば……！）
そんなことを考えて、手に持つ武器をしっかりと握る。
「《懺悔君主（ウリエル）》……【閃光（ルクス・ヴァイス）】」
光を纏い空飛ぶＡＳＴの隊員に向かって飛び出す。
「来るぞ……！なに?」
手に持つ武器は両断され、落下による浮遊感に襲われる。
「このぉぉぉぉ!!」
他の人達も挑みかかるが、目で追うのも不可能の速度で、その場に居た全員を無力化し飛び去る。
（誰も死んでいないことを祈るしかないよ…）
焔華は適当に人が寄り付かなさそうな場所に降り立つ。
「このままだと、目立つよね。服装変えないと」
霊装を解除して新たな服を作り出す。ノースリーブの白めの服に水色のノースリーブの上衣に黒いショートパンツにブーツ。と言う服装だ。
「よし、これなら良いよね」
呟きながらも大きく深呼吸して歩き出す。そして道路案内標識を見た、そこには天宮市と書かれていた。

同じ境遇のひと

焔華は天宮市を歩いていた。名前以外に特に覚えていることはなく、ただ歩いていた。

(どうしよう、住んでいる場所も何も分からないけど……。名前以外分からないて記憶喪失だよね!?)

肩を落としながら、店のガラスの方を見る。今の焔華の姿は髪の色は金髪で赤い瞳。髪は肩に掛かる位伸びている。それにノースリーブの服と、ショートパンツにブーツという感じだ。少し早い気もするが本人は気にしている様子は無かった。

「こんな感じになってるんだ。これなら変に目立たない筈だね」

よし、っと店のガラスか退き、再び街を歩き出す。そして考える。自分が襲われた理由と、自身がクレーターの真ん中に居た理由を。

(私があの場に現れたから、クレーターが出来て街が壊れた?と考えるのが普通だよね。でも、何故そうなったんだろう)

分からない。自分の力は普通ではないし自分は精霊だ。だが、誰かを傷つけたいとは思っていない。しかし、何度も来るなら何度も追い払うとは思っている。記憶もない宛もないのだからどうしようも無いのだ。

「……それ以上に食住どうすればいいんだろう」

途方に暮れる。焔華はある意味危機に陥って居たのだ。住宅街の中にある公園のベンチに座りながらどうしたものかと考える。

「しばらくは野宿かなぁ……まぁ何とかなるかな?」

考えても仕方ないと思い公園のベンチから立ち上がり、再び住宅街を歩く。見渡しながら散歩気分で歩いていた。天気も良いし風もそこそこ気持ちいときた。

「ふぅ、なんか気分が軽い……スッキリするね」

誰に言うでもなく呟くように言葉を漏らす。そんな時、曲がり角で人とぶつかる。不意にぶつかったというのもあり、互いに尻もちを着いてしまう。

「あイタタタ……大丈夫ですか?」

「あぁ、大丈夫。こっちも悪かった……」
ぶつかったのは学生服を着ている男子学生だ。やや中性的な顔立ちの少年だ。
焔華はすぐに立ち上がり、手を差し出す。少年はぼうっとして手を取ろうとしない。
「……本当に大丈夫？」
「え、ああ。ありがとう」
少年は焔華の手を取り立ち上がる。焔華はどこも怪我してなさそう少年を見て胸を撫で下ろす。
「それじゃあね！」
焔華はそう言うとまた歩き出す。
「お、おう！」
少年もつられて返事をするが、違和感を感じていた。どうしてそこまで目を惹かれたのか、不思議な感覚を感じていた。
一方の焔華は……。
「はい、お婆さん！」
「ありがとうね、お嬢ちゃん」
「いえいえ、当然のことをしたまでです！」
人助けをしていた。荷物を重たそうにしているお婆さんに出会い、見過ごすことが出来ず荷物を代わりに持ち、お婆さんの手を握り階段を上がり、お婆さんの家の前まで運んでいたのであった。
「それじゃあまた何処かで！」
焔華は手を振り別れを告げて散策を続ける。というより、今現在は今日どこで寝るかというのを考えているというものだ。
「うーん、どうしよう。人気のないところに行くしかないかな……」
足は森の方に向き、森の中に入って行く。森にはもう使われなくなったであろう廃屋が存在していた。近寄り難い雰囲気があるのが好都合と思えた。
「とりあえず、一夜ここで過ごそうかな」
廃屋に入り適当なところに体を預け目を瞑る。意識はあるが、目を瞑って寝れるようにするしかない。不意に、眠気が強まり休眠状態な

る。
どれほどの時間が経ったか、焔華は目覚める。目が覚めると立っていて森に居た。
「あれ？廃屋で寝たはずなのに…」
廃屋ではなく森の入口付近である。クレーターも出来ていない。
「クレーターが出来ていない……。何か条件あるのかな？」
自身の姿を確認すると霊装姿であった。このまま街に出ると目立つと判断し、この間と同じ服に変えて、街の方から
ウウウウウウウウウウウウ――――――
けたたましい警報音が鳴り響いた。ただ事じゃないと言うのは分かる。それと同時に霊力のを感じ取る。自分と似た存在が街に来ようとしているのだと。
「もし、私と似たようなことになれば……急がないと！」
見過ごす訳には行かない。焔華はそう思った。眼前の光景は爆音と景色が変わり、その場所にはクレーターが出来上がっていた。焔華は拳を握りながら走り出し飛び出す。
「来て、《懺悔君主（ウリエル）》!!」
天使の名を叫び一つの光弾となり飛ぶ。

――――――――――――――――――――

五河士道は村雨令音と共に〈フラクシナス〉に乗り込んでいた。空間震による精霊の現界、そしてその精霊を取り巻く現状を見る為に。五河士道には精霊の力を封印する能力があり、その力で夜刀神十香の精霊の力を封印し日常生活を共におくっている。十香は士道が初めて助けた精霊だ。
「来たわね二人とも。もうすぐ精霊が出現するわ。令音も用意をお願い」
〈フラクシナス〉の艦長で、士道の妹・琴里は指示を出す。令音は小さく頷き、コンソールの前に座り込む。
「さて、あまり時間をあげれなくて悪いのだけれど。腹は決まったの

かしら、士道」
「……っ」
息を詰まらせる士道。琴里はふと思い出したように言う
「そうだ、士道、精霊が来るまで時間があるから今のうちに二日前のことを話すわ」
士道はあっけに取られる。唐突に話題が変わるのだから驚くのも無理はない。琴里はお構い無しに続ける。
「二日前、新種の精霊が確認されたわ」
モニターにはその新しい精霊が映し出される。その姿は肩まで伸びた金髪に赤い瞳の少女が映し出された。
「これが新しい精霊よ、識別名は〈フレイ〉と命名されてるわ」
「知ってる……。俺、あの子と会ったことが、ある」
「なんですって？何かされなかった？」
「いや、住宅街でぶつかったくらいかな……」
その言葉を聞いて琴里は続ける。
「いい？あの精霊自体は恐らくそんなに攻撃的じゃないと思うわ。でも、気をつけるべきよ」
琴里は映像を変えるように指示した。そこに映し出されたのは、迫り来るミサイルを光弾で落としたり、地面を融解させるほどの炎の壁を作り出し防御したり。そして、目では追い切れない速度でＡＳＴの装備を全て壊してどこかに行く姿が見えた。それを見終えたタイミングでけたたましいサイレンの音が鳴り響く。
「非常に強い霊波反応を確認！来ます！」
「オーケイ。メインモニタを、出現する予測地点の映像に切り替えてちょうだい」
メインモニタに映し出されるのは空間震の映像。空間震が終わる頃にはすり鉢状に削り取られた跡のようなものしか残らなかった。そこにあった店や電柱は勿論、道路すらも無くなっていた。
そのさまを見た士道は十香と初めて会った事を連想する。空間震が起こるところを見た、爆発する瞬間を目撃したのも初めてだ。
「でも今回の爆発は小規模ね」

「僥倖――と言いたいところですが〈ハーミット〉ならばこんなもんでしょう」
「精霊の中でも大人しいタイプだしね」
　空間震は起こっているが、今回の規模は他のと比べると比較的軽微なものなのだ。それからも事態は動き続ける。〈ハーミット〉や〈フレイ〉が精霊に名付けられたコードネームと言う説明を受けた、そして士道が驚いたのはクレーターの中心に確認した小さな少女の姿に。理由は、その少女の姿に見覚えがあったからだ。しかし、その時は空間震が起こっていなかった。
「俺、あの子にもあったことがある」
「……一体いつの話よ？」
「つい昨日だ……っ、学校から帰る途中に急に雨が降ってきて」
　記憶を探りながら、簡潔に出来事を話す士道。それを聞いた琴里は艦橋下段のクルーに指示を出す。
「昨日の一六〇〇時（ヒトロクマルマル）から一七〇〇時（ヒトナナマルマル）までの霊波数値を私の端末に送って。大至急！」
　送られたデータを手元の画面で確認し、苛立たしげに頭をかき
「……数値の乱れはないわね。十香の時と同じケースか。……士道、なんで昨日や二日前のこと言わなかったの？」
「無茶言うなよ。会った時に精霊だと思わなかったんだ……！」
　士道が叫ぶのと同時に〈フラクシナス〉艦橋に設えられていたスピーカーからけたたましい音が響く
「なんだ、一体――」
「精霊が現れたんだもの。仕事を始めるのは私たちだけじゃあないでしょうね」
「ＡＳＴ……か」
　士道の言葉に頷く琴里。画面では〈ハーミット〉と呼ばれる精霊がいた場所は煙が巻いていた。攻撃されたと言うのはそれだけでわかる。その周囲には機会の鎧を纏う人間が数名浮遊していた。対精霊部隊（アンチ・スピリット・チーム）。通称ＡＳＴ。琴里達の組織〈ラタトスク〉とは異なり、武力を以て精霊を殺す事を目的とした部隊である。

〈ハーミット〉は煙から飛び出す。彼女はパペットを掲げるような格好で宙を舞う。ＡＳＴ隊員たちの間を抜けていくが、ＡＳＴ隊員たちはすぐにそれに反応すると、一斉に〈ハーミット〉を追跡した。そしてそのまま、身体中に装着している武器から、凄まじい量の弾薬を発射する。

「……っ！危ない！」

反射的に叫ぶ士道。しかし、画面越しの言葉は届くことは無い。ＡＳＴ隊員の放った無数のミサイルや弾丸は無慈悲に〈ハーミット〉に迫る。

しかし、その叫びに応えるように空から極光が〈ハーミット〉を守るように、迫り来るミサイルと弾丸を消滅させる。そして、それを放った張本人が、〈ハーミット〉とＡＳＴ隊員たちの間に割って入る。金髪に赤い瞳、右手には紅い剣、左手には上下に矛先が存在する光の槍を持つ精霊

「あの子は！」

「まさか、このタイミングで姿を現すとはね〈フレイ〉……！」

そう、彼女がおなじ境遇の少女を守るべく姿を現した。

出会う三人

「気をつけろ！相手は〈フレイ〉だ！油断すると落とされるぞ！」
　ＡＳＴに緊張が走る。今回現れたのは大人しい〈ハーミット〉。それの殲滅に趣いたＡＳＴだが、その〈ハーミット〉を守るように〈フレイ〉が姿を現した。二日前にその姿を確認された新しい精霊。対峙した隊員は全員無事だったが、装備を一瞬で全て破壊されたり、地面を融解させるほどの熱を持った炎を出したとか報告に上がっていた。必然的に危険度は高く設定されていた。〈フレイ〉は炎の様な霊力を纏い空中に立つ。
「っ…あっ……あれは……！」
　鳶一折紙の脳裏には5年前の光景が思い出される。燃える街並みの事をいやでも連想してしまった。それを引き起こしたのが〈イフリート〉とされているが。それでも、目の前の炎を操る精霊を目の前にして冷静ではいられなかった。
「大丈夫だよね？さあここから早く逃げようか！」
　焔華は焔華で〈ハーミット〉の方を見て笑顔で言う。
『ありがとうねお姉さん！よしのんのこと守ってもらっちゃってー』
　パペットを器用に動かしお礼を言ってくる。
「ううん、礼を言われる程じゃないよ！とりあえず行こう！
〈懺悔君主（ウリエル）〉【炎剣（ソル）】解除！」
　右手の【炎剣（ソル）】を消しよしのんの右手を握り飛行する。ＡＳＴも逃がさないように追撃を仕掛ける。ミサイルや弾薬を惜しげも無く焔華とよしのんに向けて放つ。焔華は振り返り、右手で、よしのんを抱き抱え左手の槍を上に翳し……
「〈懺悔君主（ウリエル）〉！【天光雨（ラディウス・インベル）】!!」
　空中から光の雨を降らしミサイルや弾薬を全て破壊し、その隙にまた逃げる。しかし、その攻撃は囮であり本命は
「はあああああ!!」
　正面に回っていた鳶一折紙だ。今焔華は背後のミサイルを迎撃した為、背中を見せている。絶好の機会だ。そんな機会を逃してたまる

かと折紙は切りかかる。しかし、
「おっと！切られる訳には行かないよ！せいっ！」
察知した焔華は左手の槍でその斬撃を防ぎ、振り向きざまに右足で折紙に蹴りを入れて距離をとり、逃走を再開する。
「外なら遠慮なく撃ってくるよね。そうなれば……」
焔華は飛行しながらどこかに逃げようと考えていた。そしてあれだけのものなら空中戦をメインにしているなら屋内の方がいいと考えた。
「なら、あそこがいいかも、しっかりつかまっててよ!!」
そして商店街の先のデパートが身を隠すのに向いていると思い、飛び込むことに決め、ガラスを突き破り中に入る。
デパートの中で着陸し、よしのんの手を離して天使を解除する。
「とりあえず、しばらくは大丈夫かな」
『いやー本当にありがとうね。どうやら君もよしのんと同じ存在みたいだね』
よしのんの口調は明るく陽気と言えるものだった。
「見たいだね。とりあえず自己紹介と行こうか？私は焔華、天輝焔華。焔華って呼んで」
『自己紹介ありがとう！よしのんはよしのんって言うんだよ！可愛いっしょ？可愛いっしょ？』
「うん、いい名前だねよしのん」
自己紹介を済ませ、デパートの中を歩く。話を聞けば何時もこうして時間を使い消えるのを待ったりしているとの事だった。
『でも、初めてだよ。こっちに来ては、攻撃ばっかりされるしね。話なんて通じないしね』
「そう……だね。ただ一方的に攻撃してくるもんね。少しくらい話してくれてもねー」
と言う焔華だが真っ先にとった行動が、無力化という時点でどっちもどっちと言われてもだろう。
『焔華ちゃんはどうしてよしのんを助けに来たの？』
よしのんは不思議そうに聞いてくる。焔華は真っ直ぐ見て

「私と同じような存在が出てきた時、あの人たちに攻撃されると思ったら助けないとって思ってね。それで助けに来たかな」
放っては置けなかった。見捨てることなんて出来なかったと言う。自分も彼女達の前に出れば攻撃されるのは分かっていた。それでもお構い無しに出てきたと言うのだ。その時、デパートの中に誰かが入ってくるのを感じ取った。
そして足音が聞こえてくる。焔華は警戒する、先程の人達が痺れを切らしたのか強硬手段に出たと思ったからだ。しかし、その人物はいつか住宅街の角でぶつかった少年だった。

「君は角でぶつかったときの……！」
『おおやぁ？誰かと思ったら、ラッキースケベのおにーさんじゃない』
土道は〈ハーミット〉と〈フレイ〉が逃げ込んだデパートに入り、琴里の指示で二人がいるポイントまで来て出会えたのだ。〈ハーミット〉はパペットが器用にぽん、と手を打ち、〈フレイ〉は首を傾げながら土道を見ている。すぐに、右耳のインカムから琴里の『待ちなさい』の声が聞こえてくる。
〈ハーミット〉と〈フレイ〉の言葉のすぐあと
①「ああ、久しぶり。元気だったかい？」と素直に挨拶する。
②「ラッキースケベってなんだラッキースケベって！」軽快なつっこみを入れる。
③「ふ……っ、知らないね。私は、通りすがりの風来坊さ」ハードボイルドに決める。
と三種類の選択肢がでてきた。そしてそれらを選ぶのは〈フラクシナス〉に居るメンバー達である。そして最終は艦長の琴里である。
「総員、選択開始！」
琴里の号令でクルー達が一斉に手元のボタンを押す。その結果は琴里の手元のディスプレイに映し出された。結果は全て同数である。
様々な意見が出る。『ギャルゲーの主人公的なツッコミがいい！』とか『相手の性格が分からない以上安全に①が良い』とか『今までの

データから〈ハーミット〉が人間にほとんど攻撃して来ないから③に勝負に出るべきだと』
その意見に対して
「しかし、〈ハーミット〉だけではなく〈フレイ〉も居ます！彼女に関するデータは殆どありませんし未知数です！危険です！」
もっともなこと言っている。しかし投票は同数である。三方向からの意見に耳を傾けて、琴里はあごに手を当てて唸り、そして士道に指示を出す
『――――士道、③よ』
「……っ、なんだそりゃ……」
耳に届いた琴里の行動指示。その指示が突飛なものだった。
『うぅん？どったの？』
「どうか……した？」
二人は首を傾げながら士道の方を見ている。士道は覚悟を決めて、近くに陳列されていた椅子に足をかけ
「ふ……っ、そんな奴のことは知らないね。私は、通りすがりの風来坊さ……」
きざったらしく言い、髪をかきあげて見せた。
「……？？？」
『……』
〈フレイ〉は理解出来ていない風に首を傾げ〈ハーミット〉のパペットはポカンと口を開けたまま、黙った。なんとも言い難い空気になる。そんな空気に耐えかねた士道は
「……お、おい、琴里。どうしてくれるんだこの空気……」
士道が小声で言った瞬間
『ぷ……っ、は、ぁはははははっ！』
パペットは頭を揺らし笑い出した。その様子に〈フレイ〉も驚いていた。
『なぁーにぃ、おにーさん意外とひょうきん者？あっはは、面白いけど、今どきそれはないわー』
「は、はは……お気に召したら何よりだ」

（緊張を解すために言ったのかな？）
〈フレイ〉はそう考えながら士道の観察を続ける。
『やー、しかしラッキースケベのおにーさん。珍しいところで会うねー。ぁっはっは、おにーさんみたいなのは歓迎よー？こっちに来たら、すーぐにチクチク攻撃してくるんだよねぇー。今回は焔華ちゃんが助けてくれたからそんなことも無かったんだけどねー』
〈ハーミット〉が話す言葉の中に気になる単語が出てきた。士道はそれを聞く
「なあ……よしのん、焔華、って？」
　士道が問うとパペットが驚きを表現するように、口を大きく開けた。
『ああっ、なんてみすていくっ！よしのんともあろう者が、自己紹介を忘れるだなんてっ！よしのんはよしのんの名前！可愛いでしょ？可愛いっしょ？そして、焔華ちゃんは』
　パペットは〈フレイ〉の方に手を向ける。〈フレイ〉は頷き
「私の名前は天輝焔華、よろしくね。君の名前は？」
「俺の名前は五河士道だ」
「いい名前だね、士道君」
『士道くんねー。かっこいい名前じゃないの。ま、よしのんには勝てないけどねぇー』
「お、おう……ありがとう」
　自己紹介を終えて雰囲気はいい感じではある。しかし、この後、パペットに着いてよしのんの地雷を踏み抜いて士道は誤魔化すことになった。しかし何とか取り直した。
『間を空けないの。とにかく、精霊に逃げられないようにして』
「ど、どうやって……」
　士道は琴里の指示を聞く。焔華は外を少し警戒していた。入ってから時間は少し経っているが入ってくるの様子が無いのが不思議だった。
（入って来ないなら、それでいいんだけどね。流石にこんな所で戦えば、この建物が壊れてしまうしね）

「じ、時間があったらちょっとデートしよう」
「……え？」
　士道の言葉に思考が止まる焔華。今この状況で出てくると思わなかった言葉だ。だけど、焔華はこの街のことを知らないからこのデパートでも知る機会になるだろうとは思った。
『ほっほ～！いいねー。見かけによらず大胆によしのんと焔華ちゃんを誘ってくれるじゃーないの。うふん、もちろんよしのんはおーけんよん。ていうか、ようやくまともに話せる人その二人目に出会えたんだし、よしのんからもお願いしたいくらいだよー。焔華ちゃんは？』
「私もいいよ。私も人とあんまり話すこと無かったし新鮮かな」
「そ、そうか……」
『……ま、結果オーライにしておいてあげる』
　そして、士道、よしのん、焔華の三人でデパートの中を歩き出す。

タイミングは悪く

三人が出会ってからどのくらいの時間が経ったか分からないが、デパートを歩き回り会話に花を咲かしていた。時より琴里から指示が飛ぶことがあるが、笑いの沸点が低いよしのんは笑い、焔華はそのやり取りを見て笑っていた。

二人の精霊の精神状態をモニタリングしている〈フラクシナス〉艦橋でもいい数値が出ているらしい。

『――ふむ、存外いい感じじゃない』

『そうだな。よしのんは今すぐキスしようって言っても拒まれないくらい上々と行ってもいい。焔華の方は友人位の好感度だな』

「……おいおい」

冗談か本当か分からない言葉に頬をかく。しかし士道も驚いていた。今では十香も会話できるようになったが、最初会ったときには酷い人間不信であり、言葉を間違う度に死にそうな目にあった。しかし、よしのんと焔華は友好的に接してくれる。

『やっぱりお喋りするのはたーのしーいねー。どうもあの人たちは無粋でさー』

「そうだね、姿を見るなり攻撃してくるもんね」

「は……はは」

士道にとっても会話が弾むのは願ったり叶ったりであるし、数値的にも機嫌や好感度が上がっているのなら、何も問題はない。……はずだが、パペットを操っている少女を見る。雄弁に喋るのはパペットの腹話術だけで本人の口はピクリとも動いていない。それは焔華も思っていたが、さっきのよしのんの反応を見るに踏み入れては”行けないところ”と感じた。しかしそれ以上に

(楽しい……人と話すって落ち着いてられる)

焔華もまた、デパートの散策を楽しんでいた。すると

『――おぉ?すっごーい!何かねありゃー!』

よしのんが興奮気味に手をばたつかせ、その場からとてとてと走っていく。よしのんが興味を示したのは、お子様用の小さなジャングル

ジムらしかった。焔華と士道もその後を追いかける。よしのんは器用に両足と右手で上り頂点に到達する。
『わーはは、どーよ焔華ちゃん士道くん。カッコイイ?よしのんかっこいい?』
声を弾ませながらよしのんは訊いてくる。
「お、おい、そんなところに立ってると危ないぞ」
「カッコイイと思うよ、よしのん」
よしのんは士道の方を向き不満げに
『んもうっ、カッコイイかどうかって訊いてのにぃ――――っと、わ、わわ……っ!?』
よしのんはバランスを崩し、ジャングルジムの上で踊るように手を振ってから、士道の上に落ちた。
「大丈夫!?よしのん、士道……くん?」
落ちたよしのんとその下に居た士道を心配するが、焔華の目に入ったものは、形的にキスをしている形になっていたのだ。
『……』
よしのんは無言のまま、体を起こす。そのタイミングで二人の口が離れた。
『あったたたぁー……ごめんごめん、士道くん。不注意だったよー』
「二人とも怪我は無いみたいでよかった」
焔華は胸を撫で下ろし、よしのんの頭を撫でる。今度は士道の方を見ると、士道の後ろに新たに女の子が居た。
「と、十香……?」
士道は目を見開き、そこにいる少女の名前を呼ぶ。焔華も十香の様子を見る。体は雨で濡れていて荒く肩で息をしていた。走って来たのだろうと分かる。
「――シドー。……今、何をしていた?」
「……っ、な、なにって……」
焔華は察知する、さっきの事故はこの少女にとって気に入らないということと、士道と十香という少女は仲がいいということ。だが、今は……

「――あ、あれだけ心配させおいて……」
「え……？」
「女とイチャコラしてるとは何事かぁぁぁぁぁっ！」
だんッ――！
十香が叫び足を打ち付けた瞬間、その位置を中心に床が陥没し、周囲に放射状の亀裂が入る。
「な、ななな……」
「うそ……」
突然の事態に、士道と焔華は戦慄する。士道は精霊の力を封印して人と変わらないと言われた十香が床を陥没させたことに驚き、焔華は人だと思っていたのにここまでのことが出来ることに驚いた。
士道は琴里に『状態が悪化する前に、何とか十香の機嫌を直しなさい』と言われたが、どうすればいいかわからないでいた。そんな会話をしているうちに、十香は士道とよしのん、焔華のもとに到達していた。鋭い視線で三人を交互に見て、よしのんと焔華に指を指し
「……シドー。お前の言っていた大事な用とは、この娘達と会うためだったのか？」
「あ、いや、それは……」
焔華はどのタイミングで入るべきか考えていた。そんなタイミングで
『……いやぁー、はやぁー……そぉーいうことねぇ……おねーさん？ええと――？』
よしのんは十香の登場でキョトンとしていたがうさぎの顔をいたずらっぽい笑顔にして十香の名前を聞く。
「……十香だ」
パペットに言われ憮然とした様子で返す。
『十香ちゃん。君には悪いんだけどぉ、士道くんは君に飽きちゃったみたいなんだよねぇ』
「な……っ」
「……!?」
よしのんの爆弾を投下するような発言。そこから始まるは、よしの

んと十香の口論である。士道がよしのんに対して発言しようとすればそれを十香が止めて黙らせる。よしのんは言葉巧みに十香を攻め立てる。十香は今にも泣き出しそうな顔をしていた。
『別に十香ちゃんが悪いって言ってるわけじゃないよぅ?・たぁだぁ、十香ちゃんを捨ててよしのんの元に走ってきた士道くんを責めることもできないっていうかぁ』
「よ、よしのん。もうそこまでにした方がいいと……」
焔華が苦笑いしながらがよしのんを止めようとするが、
「う、うるさい!・黙れ黙れ黙れぇっ!・駄目なのだ!・そんなの駄目なのだ!」
『ええー、駄目って言われてもねぇ。ほらほら士道くんもはっきり言ってあげなようぅ、十香ちゃんはもういらない子、って』
その言葉を聞いた時、焔華は固まる。そして寒気を感じる。理由なんて分からない、でも、奥底の何かが少し壊れそうな感覚が内側を刺激する。その硬直で遅れた。十香がパペットの胸ぐらを掴みあげた。無論小さなパペットである。よしのんのてから容易く外れる。
「……!?」
よしのんの様子が変わる。目を丸くしたかと思えば、眼球がぐらぐらと揺れ、顔面が蒼白になり、顔中にびっしりと汗が浮かんだ。さらに目に見えて呼吸も荒くなり、指先がぷるぷると震え始めていた
「よ、よしのん……?」
「大丈夫?・よしのん?」
明らかに様子がおかしい。士道と焔華はその変化に気づくが、パペットが話していると思っていた十香はパペットに詰め寄り
「わ……ッ、私は!・いらない子では無い!・シドーが……シドーが私に、ここにいていいと言ってくれたのだ!・それ以上の愚弄は許さんぞ!・おい、何とか言ったらどうだ!?」
うさぎの耳元を掴みあげながらグラグラと揺らす。
「……!……!」
そんな様子によしのんは声にならない悲鳴を上げた。おっかなびっくりと言った様子で、十香の服を引っ張った。

「ぬ。な、なんだ？邪魔をするな。今私は、こやつと話をしているのだ」
「――かえ、して……っ、くださ……っ」
よしのんは取り返そうとしてぴょんと飛び跳ねる。そして士道の耳には
『―何してるの士道。よしのんの精神状態まで揺らぎまくりよ。早く止めなさい！』
と琴里の声が響く。士道は恐る恐る
「な、なあ、十香。その……それ、返してやってくれないか？」
「……っ！」
その言葉を聞いた十香は愕然とした表情で目を見開き士道を見る。
「シドー……やはり……私よりもこの娘の方が……」
「は、はぁ？いや、そういうことじゃ……」
それと同時によしのんの霊力が高まるのを焔華は感じ取り、士道と十香の前に立つ。それと同時に
「……っ、〈氷結傀儡（ザドキエル）〉……っ！」
よしのんが右手を上げ真下に振り下ろした瞬間、床を突き破るようにして、その場に巨大な人形が現れる。
「に、人形……ッ!?」
「――なっ、これは――!?」
「これが……よしのんの……！」
よしのんは人形の背にピタリと張り付くと、その背中にある二つの穴に両手を差し入れる。その瞬間、人形の目が赤く輝き、鈍重そうな体躯を震わせながら、
『グゥオオオオオオオオオオ――――』
と低い咆哮をあげる。さらにその人形の全身から白い煙のようなものが吐き出された。
「冷たい!?」
焔華は思わず足を下げる。よしのんが小さく手を引いたかと思うと、人形――〈氷結傀儡（ザドキエル）〉が低い咆哮と共に身を反らした。するとデパートの窓ガラスが割れフロア内部に雨が入ってくる。しかし、窓ガ

ラスが割れて雨が入ってきたのではなく、雨粒が凄まじい勢いで窓ガラスを叩き割って入ってきたのだ。
そして、前方に聳える人形はギロリと十香の方に顔を向けた。焔華はそれを見て動いて、〈氷結傀儡（ザドキエル）〉に背を向けて二人を守るように立つ。そこに容赦ない雨の弾丸が突き刺さる。
「くっ…あっ…!!」
「焔華……!!」
背中に激痛を感じながらも十香の持つパペットを奪い取り、よしのんの方に投げる。よしのんは人形の口に当たる部分でパペットを咥えて割れた窓から屋外に飛び出す。
「……二人とも怪我は無い？」
少し辛そうな声で焔華は質問する。
「ああ……」
「大丈夫だ……」
士道は十香を守るような体制でいた。それを見た焔華は納得した。だが、十香は納得出来ず、士道と少し言い合いをして苛立たしげに地面を蹴るのであった。

協力協定

現在、焔華は〈フラクシナス〉に招かれていた。琴里が話したいという事を士道経由で焔華に伝わり、焔華はそれに応じたと言う事だ。
「ようこそ、〈フラクシナス〉へ。私が艦長の五河琴里よ」
「どうも、天輝焔華です」
琴里と焔華は自己紹介をする。〈フラクシナス〉艦橋は緊張に包まれていた。ＡＳＴをものともしない精霊が〈フラクシナス〉内に居て、艦長と話そうとしている。
「とりあえず、士道と十香を守ってくれたことに礼を言うわ。ありがと」
「ううん、私がしたかったからしただけだよ。お礼を言われるほどじゃないよ」
琴里は会話をしながら目の前の精霊がどんな人物なのかを探ろうとしていた。上手く行けば保護が出来き、士道に力を封印させることも可能となる。そうなればいいと考えた、数値的には友好的な数値だったからだ。
「あの、琴里ちゃん。琴里ちゃんの組織と私やよしのんを襲う人達に着いて教えてくれないかな？どうして襲ってくるか知りたいと思うし、琴里ちゃん達が友好的にしてくれる理由も知りたいしね」
焔華から話を切り出した。琴里は頷きながら、ＡＳＴについて、ラタトスクについてを話した。ラタトスクは精霊と対話をして、空間震災害の平和的解決を目指して作られた組織がラタトスクで、士道は精霊の力を封印する力があるというのを聞いた。一方ＡＳＴは対精霊部隊の通称で武力を以て精霊を殲滅する事を目的とした組織、各国にも同様の部隊が存在しているという事を知った。
「それで、他に聞きたいことはある？」
「そうだね、士道君が精霊の力を封印する力を持っているのは分かったけど、それとデートってどう関係あるの？」
「好感度をあげてキスをするのが封印の条件だからよ」
焔華はそんな条件があったんだと驚きの表情を浮かべた。そのた

めのデートだったのかと理解した。しかし、悪意や敵意は感じなかったし、助けたいと言う純粋な気持ちだと言うのは焔華には見えていた。だから警戒もしなかった。
「なるほど……。ねえ、琴里ちゃんお願い聞いてくれない？」
「お願い？」
琴里は思わず眉を顰める。精霊から取引を持ちかけられると思わなかったからだ。しかし、焔華も緊張しているというのは伝わってくる。
「うん、私の力を封印するのを待って欲しいかな。その代わりにって言うのも変だけど、私も精霊の保護に協力をする。精霊が出てきてＡＳＴと言う人達を足止めとかしないと、落ち着いて話も出来ないと思うからさ……。勿論、士道君も守るよ。どうかな？」
焔華が言うのは、封印はまだしないで欲しい。その代わり保護には協力するというものだ。ＡＳＴの足止め、士道の護衛。それを行うのが精霊の焔華と言う。
（悪くないわね。少なくても士道を守る要になるし、いざと言う時に頼りになる戦闘能力、しかもそこまで攻撃的なオーラは出さないし）
琴里からしたら、悪くは無いと思った。
「分かったわ。焔華の封印は後回しに、代わりに貴方はラタトスクに協力することでいいわね？」
「うん。ありがとう琴里ちゃん」
「礼なんていいわよ。これからよろしく頼むわよ焔華」
そして、その日の夜は……
「というわけで、焔華はしばらく家で暮らすから」
「改めて、天輝焔華です。よろしくお願いします。士道君」
五河家にお世話になることになった焔華。
「どういうことだよ琴里……何も聞いてないぞ」
士道は肩を落としながら話を聞き、驚く。
「つまり、これは焔華は俺やラタトスクのために力を振るうという事なのか？」
「まぁ、簡単に言えばそうだね。私だって、私みたいな精霊を見捨てる

なんて出来ない。だから、協力出来るならって思ったの」
「そういう事で、焔華は家で暮らすことになったわ。この前はどこで寝たか聞いた時、廃屋という答えを聞いて驚いたわよ」
「それは、まだ家で寝てもらった方がいいな」
だが、空き部屋が無い事に気づき、しばらくは琴里の部屋でお世話になることになった。そして、焔華は入浴をする。
髪を洗い、体を洗い湯船に浸かる。
「……あったかい」
ふぅーと息を吐きながら天井を見る。そして軽く自分の事を思い返してみる。
名前は覚えている、一般常識も……。しかし、それ以外の事は覚えていない。どこでどうしていたのか…まるで覚えていないのだ。思い出そうとする気には何故かならない。まるでそれを忌避しているかのように
「……私って何だろう」
湯船に浸かりながらそう考えていた。
そして、渡された下着を身につけ、寝間着を着て琴里の部屋に行く。布団は敷かれており何時でも寝れるようになっていた。
「おやすみなさい焔華」
「おやすみなさい琴里ちゃん」
焔華は夢を見た。暗い暗い闇の奥底で泣いている少女を見る夢を。焔華の声は出ず、手を伸ばすことも出来ない。目先の少女は泣いていた。そして
『ダレモタスケテクレナイ、ワタシヲ、ミナイ。ワタシハクルシイノニ』
呪詛を吐くように、世界を呪わんばかりにこう告げた。
『コンナセカイ、コワレテシマエ!!!』
「っ！」
焔華は目が覚め体を起こす。額には汗が滲み呼吸が少し乱れていた。何か怖いものを見た気がした、しかし内容を覚えていない。何で目覚めた、何を見たか焔華は少し混乱したが、頭を振り、時計に目を

やると８時半を指していた。朝である。
「起きよう…」
琴里を起こさないように布団を畳み、自身の力で服装を何時もの服装に変えこっそりと部屋を出る。
「おはよう、士道君」
「おう、おはよう焔華。ゆっくり眠れたか？」
「うん！ぐっすり眠れたよ！」
そう笑顔で答える。焔華の様子を見た上で士道はよかったと頷いた。その後１０時以降、十香と令音はお出かけに行った。
「学校休みだし……俺も午前中に買い物行ってくるか」
「私も付いて行くよ。荷物持ちさせてよ」
「女の子にそんな事させる訳には行かないだろ？」
「でも、このままお世話になりっぱなしは嫌だから……お願い！」
手を合わせて焔華はお願いする。士道は折れて
「じゃあ少し着替えてくるから待っててくれ」
「分かった！」
その時の焔華の笑顔を見た士道は少し顔を赤くしていた。
士道は家に鍵を閉め、焔華と共に商店街を目指しながら歩く。しばらく歩いて……
「ねぇ、士道君あれ、よしのんじゃない？」
焔華が指さす方向に、ウサギのような耳が着いた緑色のフード少女が居た。空間震によって破壊され立ち入り禁止となったエリアの向こうに焔華と同じ精霊である、よしのんが居た。士道と焔華は塀に身を隠すと
「警報は……鳴ってねえよな。……っ、十香の時と同じパターンか」
「必ずしも空間震で引っ張られて現れる訳じゃないんだね」
焔華は頷きながら納得する。士道は精霊なのに知らないのかと突っ込みたかったが、とりあえずそれを胸の内にしまうことにした。
「とりあえず、琴里ちゃんに連絡したら？」
「あ、ああ。そうだな」
士道は携帯電話で琴里に連絡を取る。そして士道はインカムをつ

けて
「おう、聞こえるよ」
インカムからは琴里の声が聞こえる。しかし、焔華にはそのインカムは渡されていない。とりあえず士道に付き添うしかないのだ。
『このまま彼女を放って置くことも出来ないわ。とりあえずコンタクトを取って見ましょう。そこに焔華も居るのよね？』
「ああ、居るぞ。今は買い物に付いて来てくれているんだ」
『あら、仲が良くなっているのは感心するわ。よしのんは昨日焔華に守ってもらったわ。だから、彼女がいると落ち着くと思うわ。二人で行ってくれるかしら？』
その指示を士道は焔華に伝える。焔華は頷き了承し作戦に出る。
「じゃあ、声をかけるぞ」
『ええ。――っと。ちょっと待ちなさい』
士道と焔華が接触しようとしたところで艦橋のモニタには選択肢が出る。
①声をかけると同時に仰向けに転がって腹を見せ、敵意がないことをアピール。
②すぐさまギュッとハグをして、こちらの愛を伝える。
③こちらが丸腰であることを示すため、全裸になって声をかける。
と、３つの選択肢が出てきた。
『ち、令音が居ないのは痛いけれど、仕方ないわね』
令音は今現在、十香と出掛けているため不在となっている。その選択肢がどうなっているかは分からない現場の二人。どう出るのか緊張する士道と、よしのんを見ている焔華は指示を待つ。
『士道、声をかける前に服を脱ぎなさい』
琴里は静かにそう告げた。士道は
「ごめんだよ！」
悲鳴のような叫び声が響き渡る。
「そんな大きな声を出したら！」
焔華が言うも時すでに遅し、士道の大きな声でよしのんはハッとした様子で振り返っていた。顔面は蒼白にして歯をカチカチと鳴らし、

全身を小刻みに震わせ始めていた。
「……ひっ、ぃ……っ」
今にも泣き出しそうな顔で右手をかざす。それはよしのんが天使を顕現させた際のものだ。焔華は
「大丈夫、何もしないから！」
焔華は傘をその場に投げ捨て、両手を上げて降参のポーズを取る。そして、指示を受けた士道も傘を捨て、雨で濡れた道の上に寝転がり、
「参った！降参！」
「……っ!?」
二人の行動を見て振り下ろしかけていた手をよしのんは、呆気にとられたような顔になる。よしのんは右手を元の位置に戻し、様子を伺い始める。
「……せ、成功……したのか？」
「大丈夫……だと思いたい」
士道は寝転がったまま、焔華はその場で一歩も動かないまま。
「よ、よう……」
「……」
声をかけるもよしのんは警戒するように睨むだけ
「昨日ぶりだね？」
「……」
焔華が話しかけてもあまり変わらない。その時ふと、今日のよしのんと、昨日のよしのんを頭で比べてみる。そしてあることに気づく。よしのんがパペットをつけていないことに。そのタイミングで士道も質問する。
「なあ……おまえ、もしかして、パペットを探してたりする……のか？」
士道が言った瞬間目を見開き走りより頭をガッと掴み、問い詰めるように揺さぶる。
「……っ！……っ!?」
「あッ、あててて……っ！ちょっ、止めろって」
言うとよしのんがハッとしたように士道の頭から手を離す。

「やっぱり……探しているんだね」
焔華の言葉によしのんは何度も力強く頷く。そして不安そうな瞳で士道と焔華を見る。その目はパペットの所在を問うように。
「ごめんなさい。私もどこにあるのか分からないの」
「俺もだ。どこにあるかは……」
二人が言うとよしのんはこの世の終わりを告げられたような顔をしてその場でヘナヘナとへたり込んだ。
そしてそのまま顔を俯かせ
「うえ……っ、……っ」
と嗚咽を漏らし始める。その姿を焔華はじっとしていることが出来なかった。
「っ！」
焔華は優しく安心させるようによしのんを抱きしめる。ビクッと体を震わすよしのんだが
「大丈夫……私達も探すの手伝うから……ね？士道君」
「ああ、俺もパペットを探すの手伝うよ」
「……！」
士道と焔華が言うと驚いたように目を見開いた。そして表情を明るくさせる。うんうんと首を縦に振る。落ち着いた様子を見て焔華は離れる。
「ええと……それで、なんだけど。パペットは、いつどこでなくちまったんだ？」
問と、よしのんは逡巡するように視線を泳がせ、その桜色の唇を開いた。
「……き、きのぅ……」
ウサギの耳付きフードをきゅっと握って目元を隠すようにしながらたどたどしく言う
「こわい……人達、攻撃……され……気づいたら……いなく、なっ……」
「昨日、ＡＳＴに襲われたのか」
「っ……あの後だね……」

焔華は自分が情けなく思える。よしのんが逃げ出す時に自分も一緒に行くべきだったと、悔いても仕方ないとは思っても悔やまれるものだ。
『こっちからもカメラをあるだけ送るわ。できるだけ彼女とコミュニケーションを取りながら捜索してちょうだい』
土道は紹介を示すようにインカムを小突くとよしのんに目をやった。
「よし……じゃあ、探すか、よしのん」
「……！」
よしのんが首肯し、しばし口をモゴモゴさせてから、声を発してくる。
「わ、わたし……は、」
「ん？」
「私……は、よしのん、じゃなくて……四糸乃。よしのんは……私の、友達……」
「いい名前だね。四糸乃」
焔華がそういうと、四糸乃が走っていこうとする。
「あ……ちょっと！」
その声に驚いた四糸乃は肩を震わせた。瞬間、四糸乃の周囲の雨が突然針のようになって、士道の方に飛んできた
「うわぁぁぁッ!?」
しかし、士道には一つも当たることは無かった。焔華が前に立ち、防壁のようなものを張り防いでいた。
「早く安心させてあげて」
「あ、ああ。お、落ち着いて！俺だ、俺だ！」
四糸乃はビクビクしながら振り向くと、士道と焔華の顔を見て小さく息を吐いた。
「よ、かったらこれ。……もう濡れてるかもしれないけど。ないよりマシだろ？」
士道は自分の傘を渡し、傘の使い方を教えてあげていた。焔華は自分の傘を拾い上げ、四糸乃が士道にお礼を言って捜索に戻ったのをみ

とどけ、土道の上に傘を開き、肩に手を置く。
「焔華？」
「少し待って」
そういうと、温かい光が土道を包む。すると先程まで濡れていた服が天日干ししたように乾いた。
「焔華、お前……」
「私は濡れないし、傘も渡しておくね。さ、パペット探し行こっか」
焔華は土道に傘を持たせ、先にパペット探しに参加する。